



Title	デザイン理論 45号 投稿規程/執筆要領/編集後記/ 奥付
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53005
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「デザイン理論」投稿規程

1. 内容：デザインに関する未発表の論文、研究報告等。
2. 投稿資格：本会会員
3. 採択：採否及び掲載号については編集委員会が決定する。
4. 査読：学術論文については、編集委員会が査読者2名に依頼する。査読結果は編集委員会が本人に通知する。結果は、(A)無条件採用、(B)条件採用、(C)不採用とする。
査読期間は2ヶ月程度とする。
5. 執筆要領：別に定める。

昭和37年11月11日改正、昭和60年11月8日改正、
平成2年11月10日改正、平成6年7月9日改正、
平成14年11月9日改正

6. 提出期限：基本的には随時。ただし、学術論文は、査読のため、5月春号掲載希望は、1月15日、11月秋号掲載希望は、6月30日を〆切りとする。
学術論文以外は、これは投稿予告の期限で、実際の投稿期限は、それぞれ3月31日、8月31日となります。
7. 提出先：意匠学会編集委員会
なお、以上の規程は、平成14年11月9日より発効する。

「デザイン理論」執筆要領

平成6年6月4日 編集委員会決定

1. 原稿：

原稿は400字詰め横書原稿用紙に横書きとする。

ワープロで作成する場合は、A4大の紙に1行40字、1頁30行程度で作成すること。査読論文の場合は最終原稿とともに、また、研究報告等は原稿提出時に、フロッピー（機種、ソフト等を明記）も提出すること。いずれの場合も、提出に際しては、コピーをとって手元に保存すること。

また、所定の割付用紙に割り付けを行なって、原稿とともに提出すること。割付用紙は必要に応じて各自コピーすること。

2. 原稿の分量：

分量は学術論文と研究報告はともに、図版、図表、注などすべてを含めて、刷上りで、14頁以内とする。(400字詰原稿用紙では約45枚である)。紙上発表は8頁以内、発表レジメは2頁とする。

3. 原稿の構成：

原稿には、表紙、本文、注、および学術論文と研究報告には欧文（原則として英文）

要約、キーワード、目次を付すこと。

表紙には、表題、著者名（ふりがな付き）、所属機関名を和文と欧文（原則として英文）で書くこと。

欧文要約は、刷上り1頁とする。語数は約200語。必ず、タイプライターまたはワープロで作成すること。また、できる限り、当該言語を母国語とする人の校閲をえておくこと。

キーワード（和文および英文）は、それぞれ5語以内とする。

4. 図・表のレイアウトなど：

図版はモノクロームとし、位置の指定、大きさ、レイアウト、必要なトリミングなどはすべて執筆者が行なうこと。レイアウトなどには学会指定の割付用紙で行なうこと。

図版などの著作権の問題があると思われる場合は、執筆者自身が事前に許可をとっておくこと。当学会は著作権についての責任は負わない。

編集後記

今回は掲載論文数が少なく、前号と較べて物足りないかもしれません。春号の場合は、前年の大会、プレ大会の発表者による投稿が多く、おのずと掲載論文数が増えるのですが、秋号は、むしろこれで例年並です。編集に携わるものからすれば、秋号への投稿が増えることを望んでいます。

最近は大学を取り囲む状況が大きく変化しつつありますが、それがかならずしも学会活動にとって有利な状況になるとはいえない。学会事務センターの破産騒ぎは突然的な出来事ですが、少子化の結果、数字的には受験者全員入学の時期が数年先に到来すること、今年から始まった国立大学の独立行政法人化、全大学が文部科学大臣の認証した機関による認証評価を義務化されたことなど、大学が対応するのに相当のエネルギーを費やさねばならない状況になってきています。

確かに外部評価の重視による業績の客観化、数量化の方向を強める趨勢の下では、学会発表や学会誌での論文掲載（査読付）などは評価されやすく、その意味で学会活動の意義が強化される傾向にあるともいえますが、学会運営の面では有利な状況が生まれているかどうか疑問です。学生に対するサービスが強調されると、研究よりは教育が重視されるし、研究面でも大学の自己アピールが叫ばれると、産業や地域と関係した研究・教育といった話題性を要求され、地道に積み上げる研究は相対的に軽視されることになります。学会活動は昔から研究活動の核となってきたもので、継続的な積み重ねに重要な意義をもちます。その分、時節的な話題性に欠けます。そのためか大学が学会運営活動を積極的に評価し支えようという動きは感じられません。相対的には軽視、無視の方向にあります。

再度大学に意義を訴えていくべきなのか、それとも大学離れを考えるべきなのか、これから発展策を具体的に探る際の重要な考慮点となっていると思われます。

（文責：渡辺）

編集委員

足立裕司	太田喬夫	櫛 勝彦
榎原吉郎	佐藤敬二	並木誠士
橋本英治	藤田治彦	藪 享
横川公子	渡辺 真	（委員長）

デザイン理論 45号

Journal of the Japan Society
of Design, 45/2004

発行日 2004年11月20日

発行 意匠学会

事務局 〒606-8585
京都市左京区松ヶ崎御所海道町
京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科意匠学教室内

TEL 075-724-7603
FAX 075-724-7629

発行者

意匠学会 編集委員会
事務局 〒610-1197
京都市西京区大枝沓掛町13-6
京都市立芸術大学美術学部第3研究室群合同研究室内

TEL/FAX 075-334-2255

編集責任者 渡辺 真

印刷所 株式会社北斗プリント社